

## 〈コラム〉

島内先生と健康社会学・ヘルスプロモーション  
～「愛」とともに歩まれた日々～

鈴木美奈子\*

Minako SUZUKI\*

“島内憲夫先生”という「愛」という言葉が浮かんでくる方は多いと思います。しかしながら、健康社会学の講義の中でも、最初と最後にメッセージとして贈られる程度であり、決して「愛」に関してお話する機会は多くはないのです。この事実を申し上げますと、多くの方から驚かれるのですが、それだけ印象が強いメッセージだったということかもしれません。そしておそらく、先生の講義やお話を通し、そのお人柄とも相まって皆さんの中にイメージとして定着してきたのではないのでしょうか。そんな島内先生の41年間に及ぶ順天堂大学でのご功績から、そのごく一部ではありますが、①健康社会学の創造、②ヘルスプロモーションの普及活動、につきまして、私からご紹介させていただきます。

## 1. 健康社会学の創造

健康社会学の基本には「保健社会学」が存在します。これは島内先生の恩師である、澤口進先生が順天堂大学において、日本で初めて提唱された学問であり、身体中心で病気発見、予防といった狭い意味の保健社会学ではなく、人の生命力、人生と生活、地域の力と様々なものが含まれる、ホリスティック(全人的)なものでした。心から尊敬する恩師、そしてこの学問に魅了された先生は、学生、助手の時

代と、この学問に陶醉し、その研究活動に没頭する日々を送られます。そして、運命的である1986年デンマークのコペンハーゲン大学医学部社会学研究所に留学された際に、保健社会学をより広い社会へ、より多くの人々の手に届く学問にすべく、名称を「健康社会学」にすべきであると確信され、帰国後に、恩師と同じく、日本で初めてこの学問を世に出されたという経緯です。

当然のことながら、新しい学問を創造するという事は容易なことではありません。ましてやその普及となると、相当なばらの道であったらうと拝察いたします。先生のポジティブで常に前向きなお人柄の背景には、相当なご苦勞と悩まれた時期があったこと、そして、それに打ち勝つ、強い信念と恩師への深い“愛”がおありになったのだと思います。「保健社会学あつての健康社会学である」「澤口先生がいての自分である」。このような謙虚な姿勢を常にもたれ、講義やゼミ活動の中で教え子たちに、恩師や先輩方のお話をいつも嬉しそうにされていました。その語りの中から、私たちは大きな学びを得るとともに、学問を通しての強い絆を育ませていただいたのだと痛感しております。現在では、保健医療関係の教育現場において「健康社会学」が講義として開講されるなど、世の中に少しずつ浸透されてきております。しかしながら、島内先生の中では、ご定年を迎えた今も、遠い未来を見据えたその学問体系の構想を思い描く日々が続くことでしょう。

\* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科  
Graduate School of Health and Sports Science Juntendo University

## 2. ヘルスプロモーションの普及活動

「健康社会学」と共に、もう一つ先生の業績で社会的にも大きな影響を与えたのが、ヘルスプロモーションの日本への導入であります。それは、先生が留学され、そして健康社会学が誕生した1986年にカナダのオタワで提唱されたものでありました。「このタイミングで、もし自分が留学先をアメリカに決めていたならば、ヘルスプロモーションとの出逢いはなかった」と、先生はおっしゃっておりますが、それは、ヘルスプロモーションがヨーロッパを主流とするWHOから生まれたものであるからです。この留学の際に、WHOへの訪問で出逢ったイローナ・キックブッシュ博士が、この定義をつくられた生みの親でした。このヘルスプロモーションの理念は、医学や自然科学的な視点からつくられたものではなく、社会学的な視点も大きく含むものであったことが、当時、保健社会学を継承していた先生の心を動かしたようです。その後、ヘルスプロモーションと健康社会学の類似点として、先生は以下のように述べられています。

- ① 健康社会学は社会学的な理論、そしてそのみならずあらゆる理論を社会(人びとの健康)に生かしていこうというものである。
- ② 健康の社会化を制度につなげていく。中でも、プロセスを理解しながら進めることで、制度につなげることが大切。ヘルスプロモーションもまた、プロセスを重視する活動戦略であり、公共政策づくりが大きな柱となっている。
- ③ 健康的実践活動における主体性の確立をヘルスプロモーションの定義に出会った時に感じた。個人と環境との働きかけをヘルスプロモーションも謳っていた。

また、島内先生は、ヘルスプロモーションを初めて聴いたとき「すでに日本には地域保健活動の中に存在している」と感じられたそうです。当時、イローナ博士は、ヨーロッパでつくられた概念であるとおっしゃったようですが、その後、実はヘルスプロモーションは“アジアの発想や文化からも学び、

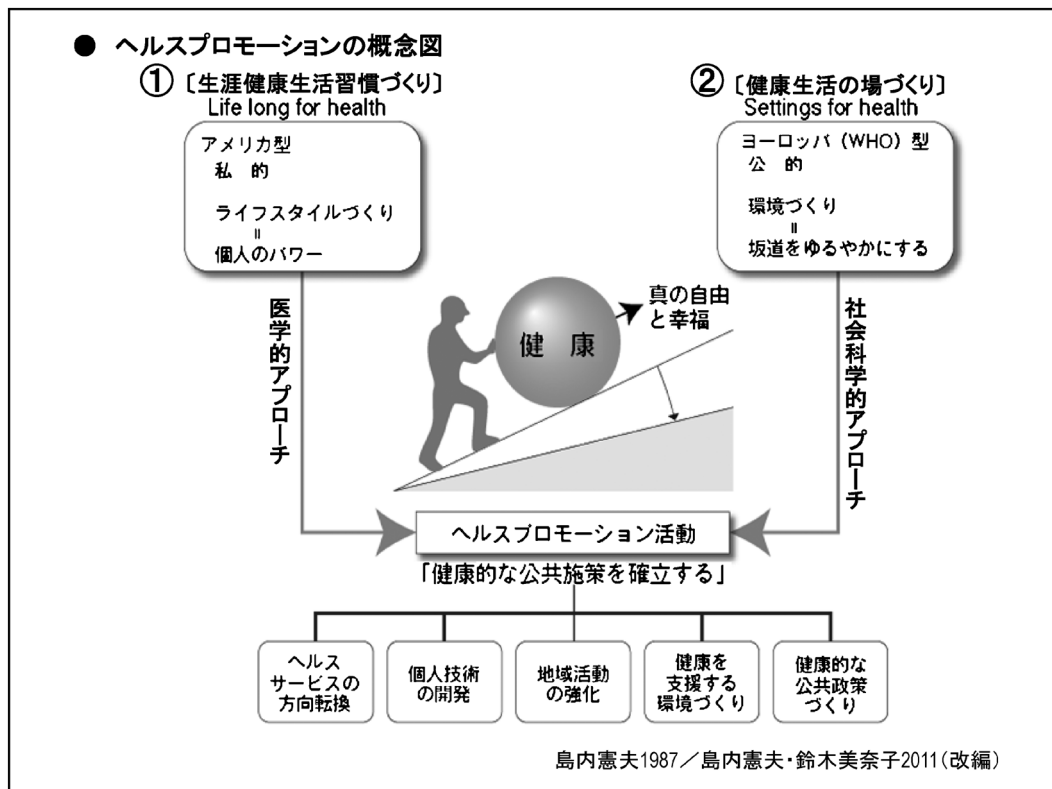
取り入れた戦略であった”と先生へ告白されました。このことから、当時、WHOを訪れていた数多くの日本人にも気づくことができなかったその価値と魅力に、いち早く気が付かれた先生の感性や直観は、まさに順天堂の歴史の中で培われてきた保健社会学の視点があったからなのかもしれません。

先生がWHOからヘルスプロモーションの翻訳権を得たことと、もう一点、忘れてはならない功績としてあげられるのが、その図式化(ヘルスプロモーションの概念図)です。帰国後に、なかなか伝えにくい概念を、図で可視化することで伝えやすくしようという、先生の感性から生まれたものであります。これは、一人の人間が坂道を「健康」の大きな球を押し上げている図であります。健康戦略には、医学的視点からの健康生活習慣づくりと、社会科学的視点からの健康的な環境づくりの両方が必要であるということを示したものです。

その後、地域の健康支援活動を中心にヘルスプロモーションが普及するほど、この図は様々な場面で活用され、また、多くの方に編集されてきました。ある時は、その編集された図から、引用元の島内先生の名前が消えてしまい、盗作騒ぎになるような時期もあるなど、それだけ、世に認められたご功績であったと思います。そして何よりも、2009年(平成21年)に文部科学省の高等学校学習指導要領でヘルスプロモーションが認められ、保健体育の教科書にこの図が掲載されるようになり、多くの子どもたちが学ぶものになったことは、島内先生にとって、大変喜ばしいことであったと思います。

このようにして、今では、日本においても保健医療関係の専門職のみではなく、そして、地域の健康づくり活動のみならず、学校、企業、保健医療施設といった様々な生活の場(セッティングズ)でヘルスプロモーションは展開され、唱道され続けています。

最後に、私的ではございますが、この度、このような偉大な恩師たちの功績を継承するという重責を担うこととなりました。奇しくも、島内先生が留学をされた歳と同じ歳であり、研究教育者として発展



途上の私にとっては、身にあまる光栄なことであるとともに、大きなプレッシャーを抱えていることも事実であります。しかし、島内先生が、澤口先生に抱いていた想いと同じように、そして「健康社会学」に初めて出逢ったときの感動を忘れずに、日々精進していきたいと思っております。この場をお借りして、このような機会と、様々な学び、学問への情熱と信

念、深い師弟愛を日々注いであさった島内先生に、心より感謝申し上げます。そして、先生が私に注いであさった“愛”を、発祥となるこのスポーツ健康科学部で、自分の教え子たちに全力で注いでまいりたいと思っております。本当にお疲れ様でございました。国際教養学部でも、先生の変わらぬご活躍を心より祈念しております。